

So What テストと Grand Mother テスト

1. プラグマティズム

So What テストとGrand Mother テスト…？

ご存知のない方にとっては、奇妙な題名だと思われることでしょう。この2つのテストは、京都大学大学院の藤井聡教授の著書「プラグマティズムの作法」の中で言及されている手法で、昨年、私が同書を手にした際、その内容に、我が意を得たり！と感動したものです。それ以降、私は機会あるごとに、いろいろな方にご紹介してきました。

これまで私は、常々、仕事を進めるうえで、①その業務のそもそもの目的は何か常に確認すること、②説明の内容が専門用語や専門知識に過度に頼らず、一般の方々にもわかりやすいものとする、③悪い情報ほど早く上げることの3点をお願いしてきました。

偶然にも、So What テストとGrand Mother テストの2つのテストは、上記①、②に関する具体的な思考手法でした。これからの日本を支える若手技術者の方にとって、今後の仕事の進め方のご参考になると考え、私なりにこの手法を説明したいと思います。

なお、プラグマティズムとは、日本語では、一般的には「実用主義」等と訳されているようです。藤井教授によれば、「人間、何をやるにしても、それが一体何の目的や意味があるかを見失わないようにしましょう」ということで、併せて「その目的が、お天道さまに対して恥ずかしくないものかどうかを、常に問い続けるようにする」ことが大切であるとされています。

2. So What テスト

So What テストとは、部下からの相談・報告に際して、ちょっと嫌みですが、「だからどうした？」「で、だから何なの？」と問いかけることから始まります。ついつい私たちは、業務を行うこと自体が目的になってしまいがちです。これを「目的の転移」と言うそうです。常に本来の目的を意識し続けることが重要です。

例えば、現在、官民上げてCIM（Construction Information Modeling）の実現を目指していますが、私は、CIMはこれまで取り組んできたCALS/ECの延長線上にあると考えています。CALS/ECの取り組みにおいても、電子データの標準化や活用は手段であって、本来の目的は業務の効率化であったはずですが、実態として、プロセスよりも手段の検討の方に重点が置かれ過ぎていた感があります。

また、現在、政策評価をはじめ評価業務に多くの資源が投入されています。しかし、評価は、いわゆるPDCAサイクルのCにあたるもので、その後のアクションにつながって初めて意味のあるものとなります。実際に行っている評価が、評価のための評価になっていないか十分反省する必要がありますと考えています。

多様な入札契約制度の導入に際しても、例えば、総合評価のテクニック等を細かく議論する前に、そもそもの導入の目的を明確にしつつ、具体的な手法を検討すべきではないでしょうか。

なお、同時に、目的自体の見直しも適宜行わな

国土交通省 大臣官房 技術審議官

ふか さわ あつ し
深 澤 淳 志



ければならないと思います。旧日本軍の組織の問題点をテーマとした名著「失敗の本質」においても、戦略のミスは戦術ではカバーできないとされています。

3. Grand Mother テスト

Grand Mother テストとは、「自分のおばあさんでも分かるような説明ができるように心がけなさい」ということです。藤井教授によれば、生活感覚に基づいた実感として物事を把握する能力は長老の女性が一番とのことでした。

液状化現象や、越水しないのに破堤が起こるメカニズムをどうわかりやすく説明しますか。また、事業の整備効果を説明する際、説明する相手の一人ひとりの生活とのかかわりを中心に、具体的に説明することも大変重要だと思います。

併せて、用語の使い方も大切です。例えば、私たちはプレストレスト・コンクリートのことをPCと言います。でも、一般の人は、パーソナル・コンピュータを連想します。「コンクリート」の復権のためにも、いい日本語訳を考案したいものです。素直に訳せば「事前圧縮コンクリート？」でしょうか。

また、ヒューム管といって、それがコンクリート管だと分かる人がどれだけいるのでしょうか。ヒューム管の名前の由来は、画期的な製造方法を1910年にオーストラリア人のヒューム兄弟が考案したことによるとのことです。

4. Bad News is Good News

本稿の冒頭に、「③悪い情報ほど早く上げること」と申し上げました。これに関連して、アメリカには次のような格言があるそうです。

Good News is No News. / No News is Bad News. / Bad News is Good News.

「良い知らせは後でいい。情報が上がってこないことが最悪。悪い知らせは遠慮せずすぐ上げる。」という意味でしょうか。

悪い情報に早く接すれば、時間的余裕があることで、さまざまな視点からとり得る選択肢の幅が広がりますし、解決に向けて多くの人の知恵を動員することができます。そのためには、どんなに都合の悪い情報でも遠慮なく相談できる環境が大切です。

若い頃、ある先輩にLeaderの先頭のLの文字はListenの頭文字のLだと教えていただきました。まず、聴くことから始まります。「聴」という字は、「耳」+「目」と「心」と書きます。心から耳を傾けることの重要性を示していると思います。

災害リスクが増大するとともに、本格的な維持更新時代を迎え、防災、減災、老朽化対策が喫緊の課題となっています。私たち建設技術者も、これまでの発想の延長線上では対応できない問題に対応しなければなりません。

今後とも、上司、同僚、部下が互いに信頼できる風通しのよい職場環境の中で、現場からの最新で正確な情報に基づいて、新たな課題に挑戦していきたいものです。